

巻 頭 言

『異文化経営研究』第7号発刊にあたって

『異文化経営研究』(Transcultural Management Review) 第7号を発行することができ、ありがたい限りである。表紙のデザインを新たにした本誌は、招聘論文二篇とレフリーによる審査を経て選ばれた研究論文三篇と研究ノート四篇を掲載している。執筆者や編集者をはじめ、発行に至るまで多くの方々に尽力いただいた。心より御礼を申し上げたい。

最近、本学会では、若手の研究者、特に大学院生の応募が増えて、さらに日本内外の留学生の報告も多くなっている。このことを反映するように、本号の特徴のひとつは、英文の論文が多く、執筆者が多国籍に亘っていることである。まさに多様な文化の担い手が手を携えて作り上げる経営が本学会でも実現しつつあることは実に喜ばしい。ますます充実した学会誌にするためには多くの応募が必要である。巻末に記す投稿規定や執筆要項に従って、会員の皆さんにふるって投稿していただきたい。

さて、2010年春には、学会創立5周年記念として発案されたプロジェクトが数年を経てようやく実り、『異文化経営の世界：その理論と実践』という記念の書が白桃書房より出版された。おかげさまで、本書は大学や大学院の授業の教材として、またビジネスマンの啓発の書として、多くの方々に読まれ、いろいろな書評にも取り上げられるなど、順調に部数を伸ばしている。これは、「異文化経営」が世に受け入れられてきた証であろう。

日本は最近、内向きになっているとよく言われるが、はたして本当にそうであろうか。振り返ってみると、2010年は、日本企業の海外現地法人の現地化が本格化した年である。これまでも数の上での現地化は進んできたが、日本企業が本腰を入れてトップに現地の人を据えようと動き出したのはこの年ではないかと思う。その意味で「現地化元年」と呼ぶことができるだろう。またこの年は日本を代表する大手企業がこぞって、外国人社員の本格的な採用に踏み出した年であり、その意味では「外国人社員活用元年」でもある。さらに、日本企業数社が英語を社内の共通語化することを打ち出した年で、いわば「英語社内共通語化元年」でもある。これら「三つの元年」が示すように、世の中は着実に変わってきている。経営のグローバル化が進むにつれ、多国籍チームでの仕事が増え、様々な文化的背景の人材を活かすことが企業の競争力の鍵を握ることが認識されてきたのだと思う。

これからも、異文化経営を通じて世界に貢献することができるよう、会員の皆様とともに歩んでいきたいと切に願っている。

今後ともご支援を賜りたく、お願い申し上げます次第である。

2010年12月

異文化経営学会 会長

馬 越 恵 美 子